

第 37 回欧州病理学会 (the 37th European Society of Pathology) に参加して

東京大学医学部人体病理学・病理診断学教室 中山敦仁

2025 年 9 月 6 日から 9 日まで、ウィーンで開催された第 37 回欧州病理学会 (以下 ESP) に派遣され、口頭発表させていただく機会に恵まれました。学会の様子や自分が参加したセッションについて報告しますので、今後、海外学会へ参加される際に役立つ内容となれば幸いです。

1. 学会参加まで

ESP では、日本病理学会との joint session が隔年で開催されているとのことです。本年のテーマは空間的発現量解析で、日本側と欧州側が中堅クラスの研究者をそれぞれ 2 名ずつ選出するとのことで、発表の機会をご提案いただきました。私のような業績の少ない研究者でご迷惑にならないかと不安になりましたが、この二度とないチャンスに挑戦することを決意しました。発表内容については、当教室の胃癌チームの牛久哲男教授、鯉沼代造特任教授、牛久綾准教授と相談して、進行中のプロジェクトである胃癌の空間的発現解析を選んで、準備を進めました。

2. 学会の様子

参加者の出身地は、ドイツ、オーストリア、イタリア、イベリア諸国、その他の東欧、北欧、北アフリカに至り、現地では多様な言語が飛び交っていました。男女はほぼ同数で、若い年齢層が主体でした。学会側の発表では、オンライン込みで 5000 人以上が参加した大規模な会だったようです。

内容は概ね日本病理学会と同じく、系統的診断講習会、一般口演、ポスター発表、共同セッションに分かれていました。診断講習会は、テーマが明確に決められていて、それぞれの専門家が豊富な組織像を提示してくれるので、日々の診断に有用な内容ばかりでした。特に、Slide seminar が各臓器について 2 時間ずつ設けられており、難解症例の鑑別の進め方を聞けるのは、大変勉強になりました。一般口演およびポスターは、意外にも件数が少なかったです (事前のセレクションが厳しいのかもしれません)。共同セッションは、日本病理学会以外に、IARC, IAP, 韓国病理学会との連携枠が組まれていました。

少し意外だったのは、AI 研究が盛んな一方で、分子病理学的な研究発表が全体的に少ないという点でした。ESP は病理医主体の学会で、診断病理学を主眼としているためかもしれません。

3. ESP-JSP joint session

私が参加した共同セッションは、3 日目の夕方でした。都築豊徳先生と Prof. Xavier Matias-Guiu が共同座長を務めてくださり、高原大志先生、Dr. Denis Schapiro (ハイデルベルク大学空間解析センター長)、中山の順で発表しました。欧州側の研究者の一人が欠席で、不覚にもトリを務めることになってしまいました。オーディエンスは 30 人程度でしたが、病理医だけでなく、computer science の背景の研究

者も多かったようです。高原先生は、前立腺癌の病理形態学と遺伝子異常を紐づける結果について、クリアにお示しになられました。Dr. Schapiro は、これまでに実装されてきた解析手技の方法論から、空間的発現量解析を個別化医療として運用する場合の臨床的問題まで、包括的に講演されました。

先のお二人が大変充実した内容をお話しされ、更に緊張感が高まる中、最後に私が発表を行いました。前半では、胃底腺型胃癌の内視鏡的切除検体に対して、空間的発現解析を行った結果、鑑別診断に有用な分子を同定したという内容を提示しました。日本のお家芸である早期胃癌検体の組織像を豊富に交えて、その診断学的重要性は十分に伝わったと思うのですが、欧米では早期胃癌への馴染みが未だに薄いのか、残念ながら、期待したほどのリアクションは得られませんでした。後半では、胎児型胃癌の空間的発現解析について提示しました。まだ解析途中の内容でしたが、胎児型胃癌特有の組織型の多彩性を、発生学的に重要な分子群の発現量変化に関連付ける試みについて、概略を説明しました。発表後、会場から多数の質問をいただく事ができましたが、組織学的変化を裏付ける分子群の探索方法や、pan-cancer アプローチへの発展方法など、高度な質問内容ばかりで、現状の自分のスキルでは十分な回答ができず、非常に悔しい思いをしました。

4. 最後に

今回の派遣においては、欧州での病理学研究の動向を知れただけではなく、他国の研究者とのディスカッションを通じて、大きな刺激を受け、今後も研究に注力していかなばならないという決意を新たにしました。また、各国の研究者が直面している問題は、意外にも共通していることも実感できました。Dr. Schapiro が講演後に、「(十分な予算があるので) 診断のサインアウトと同時に、各症例の空間的解析を追加しているが、蓄積したデータを臨床的アウトカムと結び付ける方法は模索中だ。」と言っていました。その橋渡しの役割を担えるような病理医になるべく、診断と研究を両立していきたいと思いました。

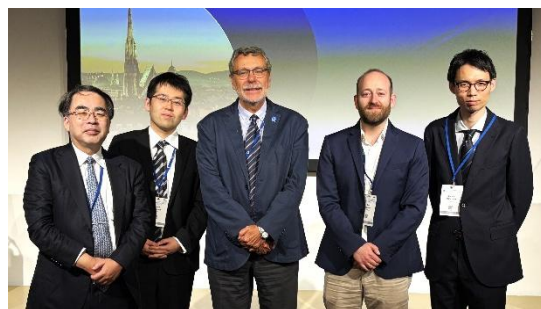
今回の派遣にあたり、セッションの策定から我々の参加費用の工面に至るまで、調整にご尽力くださいました都築豊徳先生に、心より感謝申し上げます。また、現地では、小田義直先生、山元英崇先生、岩崎健先生、高原大志先生に大変お世話になりました。日本病理学会の菊川敦子様には、派遣に際して色々な手配を頂きました。ミュンヘン工科大学の笠島-Klöppel 研究室に留学中でいらっしゃった浦礼子先生には、会場で大変お世話になり、研究室の多くの方と交流させていただきました。ご支援いただきました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。



優秀ポスター発表



中山の発表の様子



座長と演者一同で記念撮影